

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開昭 62-23201

(43) 公開日 昭和62年(1987)1月31日

(51) Int. Cl.<sup>5</sup>

識別記号

庁内整理番号

F I

技術表示箇所

H O 1 P 1/02

H O 1 P 1/165

審査請求

\*

(全 2 頁)

(21) 出願番号

特願昭60-162668

(22) 出願日

昭和60年(1985)7月23日

(71) 出願人 999999999

新日本無線株式会社

\*

(72) 発明者

\*

\*

(54) 【発明の名称】 ひねり導波管

(57) 【要約】 本公報は電子出願前の出願データであるため要約のデータは記録されません。

BEST AVAILABLE COPY

## 【特許請求の範囲】

第1の矩形導波管と、該第1の矩形導波管に対し偏波面を任意の角 $\theta$ だけ傾けた第2の矩形導波管を前記第1の矩形導波管の開口端と前記第2の矩形導波管の開口端の間に前記第1の矩形導波管に対し偏波面を角 $\theta/2$ だけ傾けて取付けた所定の周波数を通過中心周波数とする共振窓又はフィルタ窓によって整合し、これらを一体に構成したひねり導波管。

⑨ 日本国特許庁(JP)

⑩ 特許出願公開

## ⑫ 公開特許公報(A) 昭62-23201

⑬ Int.Cl.<sup>4</sup>

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 昭和62年(1987)1月31日

H 01 P 1/02  
1/1657741-5J  
7741-5J

審査請求 未請求 発明の数 1 (全2頁)

⑮ 発明の名称 ひねり導波管

⑯ 特 願 昭60-162668

⑰ 出 願 昭60(1985)7月23日

⑱ 発 明 者 及 川 和 夫 上福岡市大字福岡1500番地23 新日本無線株式会社川越製作所内

⑲ 発 明 者 斎 藤 光 男 上福岡市大字福岡1500番地23 新日本無線株式会社川越製作所内

⑳ 出 願 人 新日本無線株式会社 東京都港区虎ノ門1丁目22番14号

## 明 細 書

## 〔従来の技術〕

第2図は従来のひねり導波管の一例を示す斜視図である。

従来、偏波面の傾いた矩形導波管を連結する場合、第2図に示す構造のひねり導波管が用いられてきた。これは偏波面を徐々に傾けてゆく構造のため、電磁波の進行方向にある長さが必要であり、しかも連結部分に広い場所が必要である。

また、曲面部分で構成されるため、製作が困難で、高価なものとなる。

また、任意のひねり角度のものを得ることが困難である。

## 〔発明が解決しようとする問題点〕

この発明は、上記の問題点を解消するためになされたもので、低価格で、配設の際広い場所を必要とせず、かつ、偏波面が任意の角度傾いている導波管に即応するものを容易に得ることができる構造のひねり導波管を提供することを目的とする。

## 1. 発明の名称

ひねり導波管

## 2. 特許請求の範囲

第1の矩形導波管と、該第1の矩形導波管に対し偏波面を任意の角 $\theta$ だけ傾けた第2の矩形導波管を前記第1の矩形導波管の開口端と前記第2の矩形導波管の開口端の間に前記第1の矩形導波管に対し偏波面を角 $\theta/2$ だけ傾けて取付けた所定の周波数を通過中心周波数とする共振窓又はフィルタ窓によって整合し、これらを一体に構成したひねり導波管。

## 3. 発明の詳細な説明

## 〔産業上の利用分野〕

この発明は、矩形導波管の配設の際、配設場所の空間の状況によって、一部の矩形導波管を他の部分のものに対して偏波面を傾けて配設しなければならないときに两部分を連結するひねり導波管に関するものである。

## 特開昭62-23201(2)

## 〔問題点を解決するための手段〕

この発明に係るひねり導波管は、偏波面が角 $\theta$ 傾いた2つの導波管を1つの導波管に対して偏波面が角 $\theta/2$ 傾いた所定の周波数を通過中心周波数とする共振窓又はフィルタ窓によって整合し一体に構成したものである。

## 〔発明の実施例〕

第1図はこの発明の一実施例を示す説明図であり、図において1は第1の矩形導波管、2は第1の矩形導波管1に対し偏波面を角 $\theta$ 傾けた第2の矩形導波管、3は第1の矩形導波管1の開口端と第2の矩形導波管2の開口端の間に第1の矩形導波管1に対し偏波面を角 $\frac{\theta}{2}$ 傾けて取付けた所定の周波数を通過中心周波数とする共振窓又はフィルタ窓である。

第1の矩形導波管1に対し偏波面が角 $\theta/2$ 傾いた共振窓又はフィルタ窓3によって、偏波面が角 $\theta$ 傾いた第1の矩形導波管1と第2の矩形導波管2を整合し、連結して一体に構成したものである。

したがって、電磁波の進行方向に従来のもののような長さを必要とせず、配設に広い場所を必要としない。

また、製作は、特別な加工を必要とせず、容易であり、安価なものが得られるという利点を有する。

また、偏波面の傾き角を任意にすることが容易である。

## 〔発明の効果〕

上記のとおり、この発明によれば、配設に広い場所を必要とせず、安価に製作でき、偏波面の任意の角度の傾きに対し即応するものを容易に得ることができるという効果がある。

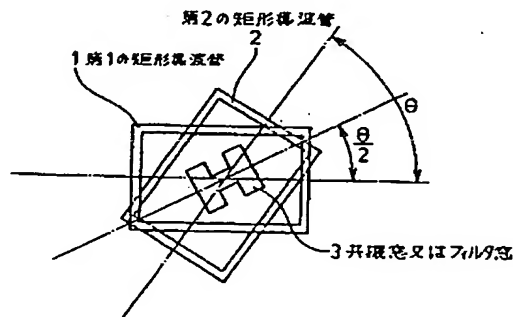
## 4. 図面の簡単な説明

第1図はこの発明の一実施例を示す説明図、第2図は従来のひねり導波管の一例を示す斜視図である。

1…第1の矩形導波管、2…第2の矩形導波管、3…共振窓又はフィルタ窓。

特許出願人 新日本無線株式会社

第1図



第2図

